

本号のテーマ : 「子ども達の未来」

日増しに暖くなるこの頃です。桜の開花も早まると予報が出ました。新型コロナウイルス感染症の広まりで、色々な場面への影響が心配です。突然の発表、休校で大混乱しました。各御家庭でもさぞかし大変な生活の変化だったと思います。無事に卒業式等が行われることを心から願っています。

外に出てみると、親子でジョギングや散歩する姿を多く見る様になりました。芝生の広場にも親子で遊ぶ姿を多く見ます。学校でも知恵を出しあい動いています。社会でも、子ども達を支えようと色々な取り組みが行われています。普段でも3月、4月は生活の変化が大きい月です。大混乱の中、子どもも大人も進もうとしています。子ども達の心の動きに寄り添い、お互いに声をかけ合い進みたいものです。

自分の出来る事として、手洗い歌を歌いながら、一生懸命にごしごしと洗っています。

♪～よしよしかめよ カメさんよ 三角お山のふもとまで
オオカミさんと競争だ ブルルン バイクで一等賞～♪

【令和元年度図書館講座に参加して】

令和2年1月13日(月)、交流文化館浅科(穂の香ホール)にて図書館講座が開催されました。初めに、読書通帳10冊を達成した2名の子どもさんが、表彰を受けました。

感想では、

『たくさん本を読むことが出来うれしい』

『支えてくれた父母に感謝したい』

『自分の物語を書いたりしたい』

『4歳から始めました。通帳は本の名前が分かっていい』

このような感想をお聞きし、改めて2, 160冊の本との出会いは素晴らしいと思いました。

次に高校生による探求活動の発表とパネルディスカッションが行われました。

3校の高校生の発表は、

『ロボコンイン信州に参加して』

『地域の活性化を考える活動に参加して』

『カンボジアに井戸を掘るプロジェクトに参加して』でした。



取り組みはそれぞれですが、試行錯誤して失敗も重ね、仲間と話し合いを重ね進んできた苦勞が伝わってきました。自分の頭でしっかり考えて、実行していく逞しさに触れさせて頂き感動しました。若者に未来を託すだけでなく、今、自分の出来る事をやろうという意欲を頂きました。

「救えたはずの命だった」

「救えたはずの命だった」という新聞の記事見出しを何度見た事でしょうか。千葉県で起こった虐待の事件です。「けられたり、たたかれたりされています。先生どうにかありませんか」と必死に伝えようとしてました。

子どもは、大人が考えている以上に大人の気持ちや行動に敏感です。そして純粋な心で深く考えます。救えるチャンスは、何度もあったはずです。「大人に言ってもダメなのか」という絶望感を抱えたと思うといたたまれなくなります。

次に、小学校4年生の女の子が亡くなる一年前に書いた作文です。「将来の夢は、パティシエになることです。最近料理に興味がでてきました。私はケーキを一人で作りたいです。家族にケーキを食べてもらいたいです」家族に喜んでもらいたいという気持ちが読み取れます。その後、亡くなる前に女の子が未来の自分にあてた手紙も報道されました。「そのままのあなたでいてください。未来のあなたをみてみたいです。あ

きらめないで下さい。」と綴っています。絶望の中でも希望を見つけて書いた自分への励ましの手紙に思えます。

「助けて」という子どもの声を聞き逃す社会であってはならない。特に子どもと接することの多い大人・教師は言葉の重みをキャッチするアンテナを鈍らせてはならない。そう自分に言い聞かせて子どもたちと関わらせて頂きたいと思います。どっしりと構えている山々のように……………。

【市 歌】 ～ 佐久・わが市（まち） ～

八ヶ岳 浅間 荒船 蓼科
山々は 優しく 今日も 見守る
のびやかに育ち すこやかに生きる
この市の仲間を すべての生命を
ああ わが市佐久 大空に愛された
ああ わが市佐久 美しいふるさと